

～このコーナーは、岩国ゆかりの人物『独立性易禅師』についてシリーズで掲載します～

独立性易禅師

どくりゅうしょうえきぜんじ
独立易禅師

第3回

～錦帯橋をつくる～



【春の錦帯橋】

長崎で医業をする独立が、名医であると岩国に伝わり、岩国生まれの皓台寺月舟こうたいげつしゅうや出島の町方役人高木作右衛門らの尽力で、長崎奉行所に許可をもらい、いよいよ招かれて来る事となりました。

1664年4月、69歳の高齢な独立が、お供数人をつれて岩国へやって来ました。岩国領主第3代吉川広嘉ひろよしとひろまさその父広正の病氣治療のため長崎から来た一行は、手厚いもてなしを受けました。孤独に明け暮れていた独立にとっては、岩国の歓待は大きな希望と喜びをもたらしたと思われます。

独立は広嘉と初対面の時、錦川河畔が郷里の杭州にある西湖の風景に似ていると話し、「西湖遊覧志」の本を見せることになりました。広嘉がその本を見た時、西湖の中の小島に架かるアーチ型の石橋に目が留まり、島のように動かない橋脚を作ることが必要だと気がきました。広嘉は錦帯橋の構想に重要なヒントを得たの

です。長年水かさが増すと流される錦川の橋に苦慮しており、名案を得て、早速写本を作らせる事を命じ、架橋（橋をかける）の準備を始めました。家臣たちに名橋の技術や石組みの方法を穴太衆*1に学びに行かせました。6年後写本が出来上がり、それに独立が題辞を書き加えています。この写本は吉川史料館と岩国徴古館にあります。一冊の本からヒントを得た広嘉の聡明さから錦帯橋が生まれました。更に、当時の家臣たちの能力と技術の高さは、岩国市民の誇りです。

こうしてできた錦帯橋は、後に薩摩の篤姫も渡り、吉田松陰も見たと言われ、全国に聞こえる美しい橋として知られるようになりました。もし、独立が松平信綱の平林寺に暮らしていたら、おそらく岩国に来ることはなかったでしょう。そうであるなら、私たちは錦帯橋あの美しい姿を見ることはできなかったと思います。

錦帯橋が生まれる瞬間は、この偶然の出会いにあったと思われます。

つづく



【独立の本】

*1穴太衆(あのをしゅう)

…主に寺院や城郭などの石垣施工を行った技術者の集団

Saryo Ooishi

記 大石 紗蓼

一般財団法人 五橋文庫 館長
岩国篆刻会 会長

